

## 「卒園児特別招待者より」

### 小羊の思い出」

#### 「天国の賞」

「月一回でも保育園に充電にきていい？」と言っていた行田卒園児 早川楓ちゃん。楓ちゃんが夢をみたと言う、「世界一の保育園に選ばれて賞状を持った市川先生が、キラキラ、キラキラ（両肩から上に手をのびし）輝いていたよ」と。お母さんへ「三回もみたんだよ、園に行つて聞いてみてよ」と言われて、ママ先生に聞くと、「エ!! すごい、実は社会福祉協議会全国大会が名古屋であり、行つて来られて賞をもらつて来たんですよ」と、母親のビックリ「エ!! エ!! ほんと」それを伝えられて、私も「エ!!」ですよね。「知るはずなのに」

楓ちゃんの思い、絵本のおじちゃんの思い、みんなの思いが伝わつて私の中では二年前から仮称「おじちゃんち」を作るべく行政との交渉、業者との折衝が続いて「小羊の子の心の基地」建設は不動のものとなりながら、行政との問題にはばまれて、二転、三転として来た。

この建物は「みんなの崇高な純粋な気持ち」が集つて建てるもの（祈り、献身）その建物は「みんなの心の基地、原点に立ち帰り新しい出発に気付く」ものでありたい。そこへ入れれば平安、休息、気付き、希望、復活、祝福へと旅立つものであるべきだと。

キラキラ輝く賞とは主の栄光につながり、主を証しする者と思う。楓ちゃんの夢が当たったとして、主よりの賞とする①「クラウディアの祈り」の出版にかかわり二人の出会い作り【愛】②おじちゃんの絵本によって小羊の理念が【光】によって用いられ、今年の推薦本の③信仰偉人伝 60冊出版に献金【行い】に対しての賞だと思われます。

すべてが主の計画。小羊はふつつかな僕としてつかえる園で賞は天国のものです。創立者市川益子（H25・11月園だより抜粋）

#### 「おじちゃんありがとう」

泣いていたつておじちゃんはうれしくはないはず。私たちが笑顔でいることがおじちゃんへの恩返しだと思います。子どもだけでなく、私達も多くの事を学ばせていただきました。些細な事でも一緒に悩み、真剣に答えを探し出して下さった先生方、本当に有難うございました。

これから先、子ども達が悩み、立ち止まった時、小羊がいつでも帰れる場所であつて欲しい。そして、嬉しい楽しい報告がいつまでもできるよう家族共々成長し続けたいと思つていきます。

卒園児保護者  
（小学一年生）

## 「小羊の想い出」

小羊との想い出で欠かせないのが、おじちゃん先生の存在です。

星組の時から早番でお世話になり、朝登園すると必ずおじちゃん先生の膝の上に座っていました。よくお友達とおじちゃん先生の膝の上を取り合いしていました。昔からあまりお昼寝をしなくて、おじちゃん先生とよく遊んでいた先生からお話を伺っていました。帰るとき、駐車場で立ち番をしているおじちゃん先生を見つけると、ものすごい勢いで抱き付いていました。いつも笑顔で優しいおじちゃん先生の事が大好きで、先生方から「彼氏」と言われるほどでした。

そのおじちゃん先生が天国に旅立ってしまった、朝の居場所が無くなってしまいました。その為、朝私から離れると大泣きし、行事の度に泣いていました。市川先生に「おじちゃんのおひぎがない」と美喜が話していた事を教えて頂き、小さい心の中で大きな葛藤があったのだと気づきました。それから、朝登園すると、おじちゃん先生の膝の代わりにおじちゃん先生の写真に挨拶し、お花を添えるようにしました。すると新たな居場所を感じてくれ、精神的に落ち着いてくれるようになりました。また、先生方

の支えもあり、おじちゃん先生が天国に旅立ってしまった悲しみを乗り越えることができました。

沢山の方々の支えがあり、ここまで成長しました。これからの人生で困難にぶつかることがありますが、小羊で過ごした経験を糧にして乗り越えてくれることと思います。大人になったら何かしらの形で恩返しが出来ればと思います。

卒園児保護者  
(小学一年生)

## 「保育園を思い出して」

夏休み中、二日間お手伝いに行かせて頂きありがとうございました。二人共良い体験となつかしさにふれる事ができ、とても喜んでいました。朝、子ども達を送って行く道のり、園に着いて先生方に「おはよう」と笑顔で迎えて頂いた時の朝の空気に私もなつかしきを感じました。二日間、それぞれのクラスに分かれて行動したそうで、侑理香は跳び箱を教えて跳べるようになった子がいた事と、ピアノを弾かせて頂き、みんなが静かに聴いてくれた事が嬉しかった事です。亜莉沙は二日間お世話になる時に、自分はピアノが弾けないし、何もしてあげられる事が無いなあ……と悩

んだ挙げ句、かるたを持って行って遊んであげようと考え、カバンに入れて出掛けました。念願通り、かるたで遊んであげられてよかったです。園の子ども達が「抱っこして。」「一緒に給食食べよう。」お昼寝の時「トントンして。」と言ってあまえてきて、みんな可愛かったそうです。家ではいつまでもあまえん坊でわがままな亜莉沙ですが、二日間お世話になって、幼い子のお世話をして何かを感じたのか、わがままが少なくなり生活に少し変化が見られました。

二日間、お手伝いに行つて「楽しかったけど、先生の大変さもわかった」と言つて幼い頃、小羊の先生方に沢山お世話になった事を二人共改めて感謝しています。そして、亜莉沙は保育士になりたい夢が大きく膨らんだ様です。侑理香も、保育士か幼稚園の先生になるのもいいなあと思つているそうです。

最後になりましたが、いつも温かく迎えてくださる小羊の先生方の心に親子共々感謝しています。貴重な体験をさせて頂きありがとうございます。それと、小羊っ子のかわいいメッセージを沢山頂きありがとうございます。一人一人の顔を思い浮かべながら、ひとつひとつ嬉しそうに見ていました。

卒園児保護者

(小学六年生、小学四年生)

「おじちゃん先生の思い出」

卒園児 小学六年生

保育園に行くとき、今でもおじちゃんが「お帰り」と言つて出て来てくれるような気がします。

思い出すのは、いつもやさしい顔をしたおじちゃんです。園児のころ登園して、おじちゃんの姿を見つけ「おーいおじちゃん」と大きな声で呼ぶと、手をふりながら「おはよう。」と言つてくれる、おじちゃんの姿が心に残っています。

卒園してからも、毎日、妹をむかえに行つていたので駐車場でおじちゃんの姿を見つけ、かけよると、「お帰りー。」と言つてハイタッチでむかえてくれました。学校での事を話すと、「すごいな、がんばっているな。」と言つていつも、ほめてくれました。

卒園してからの2年間の方がおじちゃんと、たくさん話をしたと思います。

おじちゃんがいなくなって3年たつけど、「いつでも小羊に帰つておいで」とおじちゃんが呼んでくれているような気がして、ときどきおじやましています。

みんなが集える場所が完成するのを楽しみにしていました。新しいおじちゃん家に小羊のなつかしさも、求め遊びに行きたいと思えます。

「おじちゃんせんせい、みてますか」

卒園児 小学一年生

「おじちゃんせんせい、だいたいだいーいすき。いっぱいありがとうございます。」

いま、ぼくは、このことばをおじちゃんせんせいにつたえたいです。

このほんは、ぼくのかよっていたほいくえんのせんせいをもとにしたおはなしです。とてもだいすきなほんで、なんかいもなんかいもよんでいます。みんな、おじちゃんせんせいのおひぎがだいすきでいつもとりっこでした。おひぎにすわると、あたたかくて、こころがほっとするからです。

けいたくんは、おひるねがきらいです。おかあさんがこいしくなっていないと、おじちゃんせんせいは、

「がまんせんでええぞ。おもいきりなげや。」

といつてずっとおんぶしてくれます。けいたくんは、きつどうれしかったとおもいます。おじちゃんせんせいのせなかは、あたたかくておちつくからです。ぼくだったら、  
「なかないで、はやくねなさい。」といつてしまうかもしれません。

けいたくんは、かけっこもにがてです。でもおじちゃんせんせいが、いっぱいおうえんしてくれたから、ゆうきをもらえてはしる事ができました。

このほんをよむとほいくえんのことをおもいだします。おじちゃんせんせいにあいたくなくて、ちよっとさみしくなります。おじちゃんせんせいは、びょうきでおそらになりつてしまったからです。ぼくは、もう一ねんせいになりました。おおきくなったし、がんばっているすがたをみてもらいたいです。そしておじちゃんせんせいのように、だれにでもやさしくできるひとになりたいです。

「おじちゃんせんせい、これからおそらのうえからおうえんしてね。ぼくね、ゆうきがでないときもあるんだけど、けいたくんみたいにあきらめないでがんばるからね。」



## 「読書感想文に寄せて」

息子が小学生になって初めての夏休み。読書感想文の宿題にとりかかっていた。感想文用の推薦図書を購入したのに全く読もうとしない息子。

「やっぱり、おじちゃん先生（の本）をかくよ。」息子はそういつて本棚からすつとりだした。おじちゃん先生が亡くなった時、息子は四歳。大切な人がいなくなるという経験は初めてだった。「だいたいわからないけど、かなしくなつて・・・こわいからもうききたくないんだよ。」当時の息子は、真剣な顔で静かに言った。だからこの本は、息子にとって悲しい気持ちを出すものだと思つていた。しかし、一年生になつた息子は、本を開くと懐かしそうに愛おしそうにみていた。

「もし、おじちゃん先生が帰ってきたらどうする？」ときくと「おかえり！またいっしょにあそぼつていう！」息子は笑顔でうれしそうに言った。今の息子にとってこの本は、きつと意味あるものになつているのかもしれない。

ある日の夜、学校の先生から突然電話がきた。「大悟君の読書感想文とてもよくかけています。学年代表に選ばれました。」きいた瞬間、鳥肌がたった。選ばれた驚きもあったが、息子の素直なメッセージが、おじちゃん先生に届いた気がしてうれしかった。

（おじちゃん先生ありがとう、大悟の選ばれたよ。）  
私は、心の中で何度も叫んでしまった。

このことがきっかけで、私も色々記憶を思い起こしてみた。甘えん坊の上の娘は、登園時「ママがいいよー」と毎朝大泣きして困らせた。木の温もりある園舎、部屋の真ん中におじちゃん先生がいて、おひぎに小さな子がちよこんと座つていた。大泣きする娘に気づくと「ひなこちゃんおいで。やっぱりママがいいよな。」といいながらそつと娘を抱っこしてくれた。そんな優しく心地よい朝が、あたりまえのようにあった。お迎え時、おじちゃん先生はコスモス畑の中にいて、コスモスの花が優しく風に揺れていた。下の息子は、おじちゃん先生をみつけ「バイバイ」と大きな声でいうと、おじちゃん先生は、振り返つて「おーい、だいくーん」といいながら手を振つてくれた。おじちゃん先生がいらない朝は、何か空気がちがう。子ども達もきつとそう感じたに違いない。子ども達は、縁あつておじちゃん先生に出会い、この素敵な園と共に育ち成長してきました。おじちゃん先生から沢山の愛情を注いでもらった子ども達は、今一生懸命頑張っています。ずっとずっと見守つて下さい。

卒園児保護者

（小学五年生、小学一年生）